

第1学年 社会科学習指導案

1年3組 男子21名 女子19名 計40名

【授業】13:10~14:00 会場 1年3組 (2階)

【協議会】14:15~15:25 会場 1年4組 (2階)

1 単元名 人類の登場から文明の発生へ ―世界各地で生まれる文明―

2 単元について

(1) 単元設定の趣旨

この単元は、平成29年度版中学校学習指導要領の歴史的分野の大項目B(1)ア(ア)「世界の古代文明や宗教のおこりを基に、世界の各地で文明が築かれたことを理解する」ことで、古代の社会の変化の様子について、資料をもとに多面的・多角的に考察し、表現させることをねらいとしている。

700万年近い年月をかけて、人類は猿と共通の祖先から進化を遂げてきた。その進化の過程で、長い氷期と間氷期がくり返される厳しい時代を生き抜くために、さまざまな知恵を絞り、新たな道具やコミュニケーション手段を生み出してきた。それらの多くが現代を生きる私たちにとって欠かすことのできないものとなっている。

その中で、新石器時代になると、紀元前3500年頃のメソポタミア文明を皮切りとして、エジプト、インダス、中国と世界各地で相次いで文明が発達した。そして、それぞれ発生した年代に違いはあるものの、すべての文明の共通点として、人々は農耕中心の定住生活を行う中で身分差が生まれ、権力をもつ者(王)が城壁に囲まれた都市の中心部に住むようになった。そして王は、最大10万人近い農民や奴隷を従え、神やその代理人として政治を行うための制度を確立させた。その中でも現代に続く税制度はこの時代に生まれたもので、徴税の記録として、それぞれの文明で文字が生み出されている。

しかし、これらの文明の発生地を現代の文明都市と気候面から比較すると、古代文明が乾燥帯で発生しているのに対し、現代の文明都市はそのほとんどが温帯の地域である。なぜ、温帯に比べ、気温差が大きく、降水量の少ない、一般に生活することが容易ではないと考えられる乾燥帯の地域で古代文明が発生したのかという疑問が生じる。

そこには、厳しい生活環境であったからこそ人々の知恵や工夫が見られ、大きく3つの段階を経て古代文明が発生している。まず、1つ目の段階として、大型動物の減少(狩猟生活の限界)や乾燥化に伴い、大河やオアシスの周辺に多くの人口が流入する。そして、先住民との間に身分の差が生まれ、「支配する者」と「支配される者」に分かれる。2つ目の段階として、農耕の開始が挙げられる。灌漑設備を整えて、大河や各地のオアシスの周辺で農耕が見られる。それは、従来の移住生活から定住生活が始まったことを意味する。そのら生活の中で活用するようになる。最終段階として、他地域との交易ネットワークの構築が挙げられる。農産物や毛皮を用いた工芸品が、交易ネットワークの構築により、商品価値をもつようになる。つまり、人や物のやりとりが始まることで、従来の自給自足をしていたまとまりが都市としての共同体としてさらに拡大されていくことになる。(図1)

一方で、古代文明の発生地は温帯であったとする説もある。その場合の概念図が図2である。

いずれにせよ古代文明の発生以降、長い年月をかけて人類は少しずつ文明を進化させてきた。その中で現代は、インターネットを活用した情報網

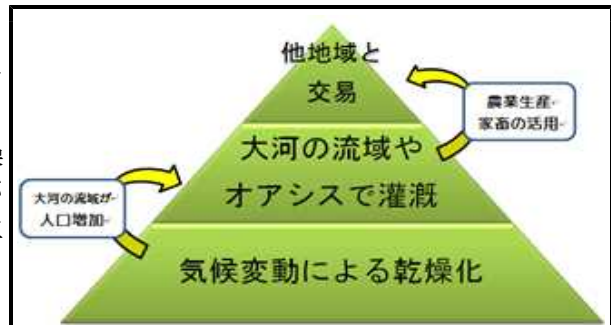


図1 古代文明が乾燥帯で発達したと仮定した概念図

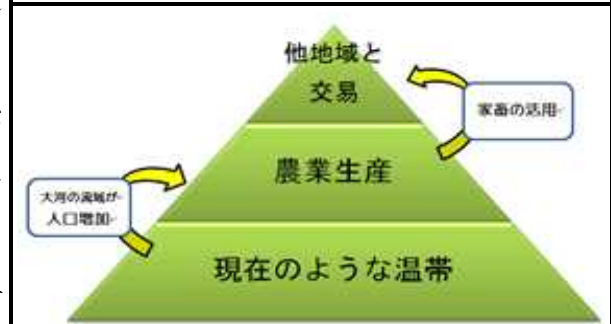


図2 古代文明が温帯で発生したと仮定した概念図

が張り巡らされたグローバルな文明世界が構築されつつある。地球温暖化や環境問題といった地球規模の問題を抱えながらも、多様な文化・文明が相互に影響し合い、時に対立し合いながらも共存し、交流を深めていると言える。しかし、間違いなくそのルーツは古代文明にあり、約 5000 年もの間、他地域との交易を通して都市文明を築き上げてきた。

これらの説明より本単元で獲得させたい概念は2つある。1つ目として、都市が形成され文明が進化するということが、段階を経て行われたことである。図1に示したように気候変動による人口変動があり、大河の流域やオアシスで灌漑施設を整えて、農業生産が行われた結果、他地域との結びつきによって、より高度な文明となった。そして、2つ目が、古代文明で確立した概念が時代の進歩に伴い、交易の手段が家畜から蒸気、そしてインターネットへと移り変わっていることである。文明の発達に、気候や地域の比重が軽くなっていると言える。古代文明を歴史的な事象にとどまらず、現代にも根付いている概念として身に付かせることで、歴史を学ぶ意義を生徒に考えさせたいと考えている。

(2) 生徒の実態

生徒にとって本単元は、歴史的分野の最初の単元である。初回の授業で行ったアンケートでは、地理的分野よりも歴史的分野に興味をもっている生徒が多く、小学校での学習内容をより深く学習できることに大きな期待をもって、授業に臨んでいる様子が見受けられる。また、これまでの授業では小学校での既習事項を想起して意欲的に発言する生徒が多い。しかし、資料をもとにして、根拠を明確にして発言することに慣れておらず、思いつきでの発言が少なくない。資料を読み取ったり、意見交換したりする活動を通して、社会的事象を多面的・多角的に考察して、自らの意見を堂々と述べることは、今後社会科を学習する中で身に付けるべき大切な資質であると考えている。そこで、本単元を通して、確かな資料を根拠に自分の考えをもち、発言する生徒を育てていきたいと考える。

3 教科の本質に迫る授業づくり

古代文明の発生地と現代の文明都市の相違点を踏まえて、乾燥帯で古代文明が発達した理由について、「仮説吟味学習」を取り入れ問いを工夫することで、社会的な見方・考え方がより育成される。

本校の研修主題は「主体性の高まりをめざす課題学習」であり、生徒が主体的に課題を解決していく学習が長年求められてきた。また、「学習指導要領の改訂の視点」における「どのように学ぶか」という観点では、「主体的・対話的で深い学びの視点からの不断の授業改善」が強調されている。その中で「問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているか」「自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているか」ということも求められている。これらを満たし、社会認識を深め、市民的資質をより育成する学習方法として、本単元では、岡崎誠司氏（富山大学）が提唱している「仮説吟味学習」を設定した。

「仮説吟味学習」とは、「子どもが教育内容に関わる自らの問題を設定するとともに、問題に対する根拠ある仮説を設定し、子ども自身が、その正当性・合理性を個人の側と社会の側の両面から吟味する過程を保障する学習」である。生徒は、学習対象が具体的で個別的な対象であってはじめて、仮説を設定することができる。ただし、その場合、生徒は個人の側から仮説を設定することとなり、教師の指導なく仮説を吟味しても常識的認識にとどまることとなる。そこで、まず第一にこの学習では、社会システムの側から仮説を吟味する過程を導入することによって、視点の転換を図ることをねらっている。

また、「仮説吟味学習」による授業づくりの第二のねらいは、生徒が地域の事象理解にとどまることなく、地域の特色を社会システムとして解釈し、よりよいシステムを主体的創造的に考えることにある。「仮説吟味学習」による授業づくりでは、個人を超えた社会システムそのものを認識対象とし、生徒にシステムそのものを正しいものとして受容させるのではなく、なぜそのようなシステムとなっているのか構造の解明を行わせたり、そのシステムの背景や原因を探らせ、問題点を明らかにさせたりする。そこで、授業は、原則として「個人の側から仮説を設定する過程」と「社会システムの側から仮説を吟味する過程」と「仮説を修正・再設定する過程」の3段階構成となる。

本単元の構成は以下のようになると考える。「仮説を設定する過程」では、「現代の文明都市は

温帯で多く発達しているにもかかわらず、なぜ古代文明は乾燥帯で発生したのか」という「問い」に対する仮説を設定する。その仮説を全体で吟味していくことで、気候変動による乾燥化で大河やオアシスの周辺の人口が急増したこと、灌漑を行うことで、乾燥帯でも農耕が可能になる地域であったこと、人々の生活に用いられた家畜は、他地域との交易ネットワークの中で人・物・情報の交流に役立ったことに気付く。これらの活動を通して、歴史的・地理的知識を基本として、社会的な見方・考え方を育成したいと考えている。

4 単元の目標

- 人類の出現から古代文明のおこりまでの流れに着目しながら、古代文明の特徴に関心を高めるとともに、都市（国家）が発展する過程を意欲的に追究しようとしている。

【社会的事象への関心・意欲・態度】

- ◎ 人類の出現から古代文明のおこりまでの流れを通して、都市（国家）のおこりと発展などの共通する特徴について仮説を立てて、吟味・検証し、自分の言葉で説明することができる。

【社会的な思考・判断・表現】

- 古代文明のおこりや発達について、その過程や共通する特徴を、資料から読み取ることができる。

【資料活用の技能】

- 人類の出現から古代文明のおこりについて、その流れや特色を理解している。

- ・ 環境の変化に伴う人類の進化
- ・ 文明の発達に伴う都市の発展

【社会的事象についての知識・理解】

5 学習指導過程（全6時間）※下線：学習課題、二重下線：単元を貫く問い

過程	教師による発問・指示	期待される生徒の反応・ <u>獲得させたい知識概念</u>
第1次 人類の進化 についての 事実認識	<p>1 人類はどのように進化してきたのだろうか。資料①</p> <p>2 人類が進化を遂げた結果、生活様式はどのように変化したか。資料②</p> <p>3 その頃の日本は、どのような様子だったか。資料③</p> <p>4 <u>なぜ人類は進化を遂げたのだろうか。</u>（学習課題1）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 猿人から原人、新人へとなっていった。 ・ 直立二足歩行を行い、道具を使用していた猿人から次第に火や言葉、土器等を使うようになっていった。 ・ 狩りや採集中心の生活から牧畜中心の生活になった。 ・ 時代を経るに従って、よりよい石器や土器が作られるようになった。 ・ 移住から定住が基本となった。 ・ 大陸と地続きだった。 ・ 人骨や石器が出土していることから人類がいたとされている。 ・ 大型の動物もいた。 ・ <u>氷期と間氷期がくり返されるきびしい時代を生き抜くため。</u> ・ 一人では生きられず、コミュニケーションをとる必要があったため。
第2次 古代文明 についての事 実認識	<p>5 古代文明にはどのような共通点があるか。資料④</p> <p>6 なぜ大河の流域である必要がある</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大河の流域で発達しており、人々の中に身分の差がある。（王が出現している。） ・ 都市を築いている。 ・ 金属器が使用されている。 ・ 文字が生まれている。 ・ 大型動物の減少に伴い、農耕をしなければい

	<p>か。資料⑤</p> <p>7 なぜ文字が生まれたのか。</p> <p>8 なぜ王が出現したのか。</p> <p>9 <u>文明とは何か。(学習課題2)</u></p>	<p>けなかったから。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家畜となる動物を飼育する必要があったから。 ・王の指示を伝達したり、税を記録しなければいけなかったから。 ・農耕をしたり、都市を拡大したりする上で、中心となるリーダーが生まれたから。 ・<u>人間が得た知識や技術によって社会が豊しく発達すること。</u>
<p>第3次 課題の設定 把握と個人 の側からの 仮説設定 (本時)</p>	<p>10 古代文明の発生地と現代の文明都市を比較すると、どのような特徴が見られるか。</p> <p>11 <u>なぜ、乾燥帯の地域で、古代文明は発達したのか。(学習課題3)</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・古代文明は乾燥帯で発達し、現代の文明都市は、温帯で多く発達している。 1班：農耕によって食生活が安定したため、都市ができて、王の指示により、古代文明が発達したのではないだろうか。 2班：家畜を活用して、工夫して農業を行ったことで、人口が増加した都市に文明が発達したのではないだろうか 3班：少ない水や食料をめぐる、争いがおこり、勝ち残った者が多くの人を従えて、文明をおこしたのではないだろうか。 4班：かつては温帯で、都市が作りやすかったのではないだろうか。
<p>第4次 社会システム の側からの 仮説吟味 (本時)</p>	<p>(2班の仮説について)</p> <p>12 農業はどのような工夫をするのか。資料⑧</p> <p>13 家畜には他の活用方法はないだろうか。資料⑨</p> <p>14 これらの工夫がどのように都市の拡大につながったのか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>かんがい農業を行う。</u> ・<u>野生動物を家畜化して、農業に利用する。</u> ・<u>他地域と人・物・情報の交流する際の移動手段となる。</u> ・<u>家畜の毛や皮での工芸製品を製作する。</u> ・<u>農産物や製品を商品化する。</u> ・他地域と交易が行われることで、新たな情報や文化、食料等が入ってきて、都市が拡大する。
	<p>(1班の仮説について)</p> <p>15 なぜ食生活の安定が文明の発達につながるのか。資料⑥</p> <p>16 人々の間にどのようにして、身分の差が生まれたのだろうか。資料⑦</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・農業によって、人々の結びつきができ、ピラミッド等の巨大な建築物は、農業ができないときの人々の公共事業だったから。 ・<u>人々が、水が得やすい地域に集まり、先住民との身分の差が生まれる。</u>そして、農業生産を行ったり、都市建設のための重労働を行ったりするから。

	<p>(3班の仮説について)</p> <p>17 争いがなぜ文明に発達するのだろうか。資料⑩</p> <p>(仮説4について)</p> <p>18 もし、古代文明がおこった地域が、当時、温帯だったとしたら乾燥帯との共通項は何か。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 争いに敗れた者が、低い身分(奴隷も含む)になり公共事業に従事するから。 農業生産が行われ、他地域との交易が行われていたこと。
第5次 仮説修正・ 再設定	<p>19 <u>なぜ乾燥帯の地域で、古代文明は発達したのか。(学習課題4)</u></p> <p>20 現代文明と比較した際に共通点は何か。</p> <p>21 現代文明との相違点は何か。</p> <p>22 交易手段が現代文明では、何に変化してきたか。</p> <p>23 交易手段として家畜からインターネットまでの間にどのような変化があったか。</p> <p>24 文明の発達に気候帯は関係あるか。</p>	<p>①乾燥化によって、水の得やすい地域に人口が集中した。</p> <p>②先住民との間に身分の差が生まれ、農耕が行われた。</p> <p>③家畜を用いて他地域と交易する中で人・物・情報の交流ネットワークが構築され、文明として発達したから。</p> <ul style="list-style-type: none"> 人・物・情報の交流が行われている点。 交易する際に家畜を用いていない点。 大河の流域等に人口が集中していない点。 インターネット 産業革命による蒸気の発明で、家畜等の動物による移動は衰退した。そして自動車等の普及を経て、現代では、インターネットが急速に発達し、大幅に時間が減少された。 インターネットの急速な発達や通信手段の多様化により、コミュニケーションが容易になったため、従来に比べ、気候帯(場所)を選ぶことへの比重が軽くなっている。

6 本時の学習(全3/6時間)

(1) 指導目標

- 古代文明(メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明)の発生地と現代の文明都市の位置を気候面で比較した際に、古代文明が乾燥帯であり、現代の文明都市が温帯であるという相違点に気づき、その理由について仮説をもつことができるようにする。
- 資料をもとに仮説を吟味して、家畜が農耕だけでなく、交易の手段となっていたのではないかという仮説をもつことができるようにする。

(2) 展開

学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
1 現代の文明都市と古代文明の発生地を挙げ、地図にプロットする。	<ul style="list-style-type: none"> 現代の都市として、思い付く都市を答えさせる。 黒板に掲示した白地図に生徒が挙げた都市をプロットする。
2 1で作成した地図とケッペンの気候区分を比較して、気付いたことを発表する。 ・古代文明は乾燥帯でおこっているのに対し、現代の都市は	<ul style="list-style-type: none"> ケッペンの気候区分を示した主題図と比較して、気付いた点を挙げるよう指示する。

- ・ 温帯に多く分布している。
- ・ 古代文明の発生地の方が、低緯度の地域に分布している。

- ・ 意図的指名で、全体に発表させる。

なぜ乾燥帯の地域で、古代文明は発達したのか。

- 3 インダスに住む古代人であれば、どのような場所に住みたいか考えて、発表する。(→生徒の答えに対する教師の問い)
- ・ 人が集まっているところ。(→具体的にはどういう場所?)
 - ・ インダス川の流域→なぜ?
 - ・ 農業をしやすいから。(→なぜ農業をしやすいところ?)
 - ・ 安定した食料を得られるから。(→食料を得られればよい?)
 - ・ 人口が増えて、都市(モヘンジョ=ダロ)となる。(→都市ができるとなぜよい?)
 - ・ 都市を運営するために身分の差が生まれ、税を徴収するので、公共施設ができる。(→公共施設があるとよい?)
 - ・ 公衆浴場や水洗トイレなどの社会基盤の中で、安全に生活できるから。

- ・ 古代文明の一つであるインダスに住む古代人であれば、どのような場所に住みたいかという補助発問を行う。
- ・ 生徒の答えをもとに「なぜ」「どのように」という問答をして、生徒の思考を深め、仮説を立てやすいようにする。
- ・ 都市のメリットを共通理解できた段階で、班ごとに課題に対する仮説を立てるよう指示する。

- 4 課題に対する仮説を立て、ワークシートに記入する。
- 仮説①：農耕によって食生活が安定したため、古代文明が発達したのではないだろうか。
- 仮説②：貴重な水の活用方法を指示するためにリーダーが登場して、身分の差が生まれたのではないだろうか。
- 仮説③：家畜をうまく活用したり、農業の工夫を思い付いたりした人間を中心に都市ができ、文明が発達したのではないだろうか。
- 仮説④：かつては温帯で都市が作りやすかったのではないだろうか。

- ・ 既習事項(各文明の知識や乾燥帯の暮らし等)を想起して、仮説を立てるよう指示する。
- ・ 根拠となる資料をもとに発言・吟味するよう指示する。
- ・ 各班で発表する仮説を1つに絞るよう指示する。
- ・ なぜその仮説を選んだか、理由とともに発表させる。

- 5 4人班で、課題に対する仮説を発表し合い、挙がった仮説から全体で吟味すべき仮説を1つに絞り、発表する。
- 仮説A(1班)：農耕によって食生活が安定したため、都市ができ、王の指示により、古代文明が発達したのではないだろうか。
- 仮説B(2班)：家畜を活用して、工夫して農業を行ったことで、人口が増加した都市に文明が発達したのではないだろうか。
- 仮説C(3班)：少ない水や食料をめぐる、争いがおこり、勝ち残った者が多くの人を従えて、文明をおこしたのではないだろうか。
- 仮説D(4班)：かつては温帯で、都市が作りやすかったのではないだろうか。

- ・ 内容の近い仮説を生徒に分類させて、グルーピングする。
- ・ 仮説Bの家畜に関する仮説が出なかった場合には、「人口が増える中で、農耕にはどのような工夫があるのか」「家畜はどのような役割を担っていたか」という発問をして、壁画 資料等から家畜の役割に気付かせる。

- 6 2班の内容に近い仮説を全体で吟味する。
- ・ 農業生産によって、食料が安定するので、人口は増加する。
 - ・ 多くの人口を養うために、より広い地域で、灌漑農業が行われた。
 - ・ 家畜は輸送手段の役割も果たしていたのではないだろうか。

- ・ 仮説吟味に必要な資料を提示する。
- ・ 家畜の役割を問うため、メソポタミア文明の遺跡から出土したインダス文明の特産品であるビーズのアクセサリーの写真を提示する。

↓
文明間での交流が行われた。

- 7 次時の予告を聞く。

- ・ 次時で他の資料を提示して、更

に吟味することを告げる。

(3) 学習評価の視点

- ・ 古代文明の発生地と現代の文明都市を表した主題図とケッペンの気候区分についての主題図を活用して、古代文明の発生地は乾燥帯であり、現代の文明都市は温帯であるという相違点を挙げ、その理由となる仮説を立てている。
- ・ 資料をもとに仮説を吟味して、家畜が農耕だけでなく、交易の手段となっていたのではないかという仮説を立てている。 【社会的な思考・判断・表現】(発言やワークシート等)

7 授業観察の視点

- ・ 古代文明の発生地と現代の文明都市を地図にプロットして、比較する活動は、生徒が主体的に取り組む学習課題を設定する上で、有効な手立てであったか。
- ・ 「学習課題」や「問い」は、思考を促すものであったか。

〔主な参考文献〕

【方法論】

- ・ 岡崎誠司『変動する社会の認識形成をめざす小学校社会科授業開発研究』風間書房、2009年
- ・ 岡崎誠司『見方考え方を成長させる社会科授業の創造』風間書房、2013年
- ・ 富山大学人間発達科学部附属中学校『主体性の高まりをめざして - 課題学習で学校をつくる - 』富山大学出版会、2009年

【内容論】

- ・ 嶋田義仁『砂漠と文明』岩波書店、2012年
- ・ 鈴木秀夫・山本武夫『気候と文明・気候と歴史』朝倉書店、1978年
- ・ B・フェイガン『古代文明と気候大変動』河出文庫、2014年
- ・ 篠田雅人『砂漠と気候』成山堂2016年
- ・ 中島健一『河川文明の生態史観』校倉書房1977年
- ・ 吉良竜夫『森林の環境・森林と環境』新思索社2001年
- ・ 環境庁『平成7年版 環境白書』大蔵省印刷局 1996年
- ・ 帝国書院『新詳資料 地理の研究』帝国書院 2012年
- ・ 湯浅赳夫『環境と文明』新評論 1993年

8 知識・概念の構造図 単元「人類の登場から文明の発生へ」の場合

